

余象斗の『列國前編十二朝』について

林 桂 如

はじめに

第一章 『列國前編十二朝』のテキストをめぐる

問題

明代中期以降、様々な講史小説が刊行された。余象斗の『刻按鑑通俗演義列國前編十二朝』（『列國前編十二朝』と略稱）は、それらおびただしい數にのぼる講史小説の中の一つであり、天地開闢から商朝滅亡までの歴史を對象としている^①。この作品については、これまで詳細な研究は行われて來なかつた。それはおそらく、テキスト自體の分量が少なく、資料的な制約があること、商朝滅亡以前を描いた同時期の講史小説が存在せず、比較する對象がないことなどによると推測される。確かに『列國前編十二朝』は他の講史小説より短い。しかし、この作品についても、出版地や出版年、書中に言及される『列國傳』のテキスト、書名「按鑑」の「鑑」が何を指すか、さらに、編集に際して参照された書物など、さまざまな問題が存在する。小論では、小説の内容そのものを中心に検討を加え、これら諸問題についての考察を試みたい。

現存する『列國前編十二朝』のテキストには、天理圖書館所藏本と神宮文庫所藏本の二本があり、いずれも重刊本とみられている^②。両者ともに上圖下文形式の全相本で、さらに各巻巻頭に挿繪がある。注は正文に挿入され、評語が各則の末尾に付されている。天理圖書館本と神宮文庫本の版面は同一であり、両者は同版と考えられるが、天理圖書館本には「敘歷傳始末」と「求虬仙降書者附錄」が、神宮文庫本には「識語」が冠されており、巻頭の挿繪枚數も些か異なる^③。本文中「盤庚復興作書湯王政」則の「鑑斷」に「辛丑年十月十九日善終」（辛丑は萬曆二十九年）という記述があり、また、天理圖書館本「敘歷傳始末」に「崇禎二年夏五月□□日書」と記載されているため、刊行年代は萬曆二十九年（一六〇一）以降、崇禎二年（一六二九）までの間であろうかと推測される。

正文の最後に「至武王伐紂而有天下、『列國傳』上載得明白可觀，四方君子買『列國』一覽盡識。（武王の紂征伐から天下掌握までにつ

いては『列國傳』に明々白々たる記載がございます、皆様におかれましては『列國傳』をお買い求めいただけますれば、一讀にして一切をご了解されることと存じます」と、『列國傳』宣傳の文句があり、『列國傳』が『列國前編十二朝』に先立って刊行されていたことがわかる。では、この『列國傳』とはどのようなテキストを指すのであろうか。余象斗が出版した『列國傳』には、萬曆三十四年（一六〇六）の『按鑑演義全像列國評林』（『列國志傳評林』と略稱）と、その十二年後、即ち萬曆四十六年（一六一八）に再刊された『列國志傳評林』（『題列國序』に「萬曆歲次戊午季秋重刊、後學仰止余象斗序」とある。戊午は萬曆四十六年）の二種がある。また、この間に別の『列國傳』のテキストが刊行されている。即ち萬曆四十三年（一六一五）に蘇州で出版された『新鐫陳眉公先生批評春秋列國志傳』（朱篁本と略稱）である。巻頭には「雲間陳繼儒重校」、「古吳朱篁參閱」と記されている。この朱篁本は蘇州で出版されたテキストであるが、正文の内容は余象斗の『列國志傳評林』にほぼ等しい。大塚秀高氏によると、『列國前編十二朝』は萬曆四十六年の『列國志傳評林』と一組にされ、萬曆四十三年の朱篁本に對抗するために刊行されたものだという。また、朱篁本の後、さらに『陳眉公先生批點列國傳』（龔紹山本と略稱）なるテキストも現れ、朱篁本に基づく刊本であると考えられる。龔紹山本の封面には「本坊新鐫春秋列國志傳、批評皆出陳眉公先生手閱。刪繁補缺而正訛謬、精工繪像燦爛之觀、是刻與京閩舊版不同、有玉石之分……（本坊の『新鐫春秋列國志傳』は、批評は全て陳眉公先生の手になるものである。繁雜な部分を削り、不足を補い、過誤を正し、精巧なる圖畫は燦爛たる觀。本書は京や閩の舊版とは異なり、玉と石ほどのちがいがあ）」とあり、『列國傳』をめぐる争いの激しさが窺わ

余象斗の『列國前編十二朝』について

れる。この争いは、蘇州と南京の間だけでなく、福建にも飛び火していたのであった。また、「是刻與京閩舊版不同、有玉石之分」とあるように、京版と閩版を同列に論じていることから、閩版が一定程度の販賣量を有していたことも窺える。

『列國前編十二朝』巻一の巻頭には「閩雙峰堂西一三台館梓行」とあり、「閩」字が付されていることが注意を引く。これについて大塚秀高氏は「講史章回小説の出版と改變——『列國志』をめぐる——」（『中國古典小説研究動態』第3號、一九八九）において「これが福建で刊行されたなら無用に屬する。わざわざ閩とことわる以上、閩以外の地で刊行されたとみておくべきだろう」と述べている。大塚氏の指摘の通り、本書がもし福建で刊行され福建の讀者に販賣されたのであれば、「閩」という文字は不要である。余象斗が「閩」字を付けて福建の書物であると強調する背後には、『列國前編十二朝』の主要販賣地が福建以外であるという事實が存在したのではないか。當時、南京、蘇州などの書肆と建陽の書肆との出版競争は激しさを増すばかりであった。『列國前編十二朝』末尾に、蘇州の朱篁本に對抗して余象斗による重刊の『列國志傳評林』宣傳文句が付されたことを考えれば、『列國前編十二朝』の販賣地として蘇州が念頭に置かれていたと考えてよいだろう。書籍の製作工程と出版については、Lucille Chiaが『Printing for Profit: The Commercial Publishers of Jianyang, Fujian (11th-17th Centuries)』（Cambridge, Mass.: Harvard University Asia Center for the Harvard-Yenching Institute: Distributed by Harvard University Press, 2002）で「建陽は自らも出版の中心地であったが、同時に他の土地の出版業者に版木と印刷済みの紙、更には時に裝丁済みの書物をも提供することもあったようだ。

そもそも書籍の印刷と出版におけるいくつもの工程は、必ずしも一つの場所で行われる必要はなく、印刷済みの紙や、時には版木そのものすらも製作されてから実際に出版する場所に運ばれたかもしれないのだ。……おそらくは建陽の製造コストがより安値だったためか、または單純に地元職工が供給できる量よりも多くの版木が必要とされたためであろう、福州で『出版』された書物の中には、物理的には建陽で製作されたものが含まれている」と指摘している（一九〇頁）。以上を踏まえると、『列國前編十二朝』は、蘇州での販賣を意圖し、低コストな地元建陽で製作したものである可能性が高いと考えられる。

次に『刻按鑑通俗演義列國前編十二朝』の「按鑑」について検討したい。「按鑑」の「鑑」は本來『資治通鑑』を指したが、當時刊行された書物の題における「按鑑」は、『資治通鑑』そのものによらず、より通俗的な『綱鑑』によっている場合がほとんどである。これについては、高津孝「按鑑考」、『鹿大史學』三九、一九九一、及び上田望「講史小説と歴史書（一）」、『東洋文化研究所紀要』第一三〇冊、一九九六）で考證されている。他ならぬ余象斗も『綱鑑』出版の經驗があり、ここで言う「按鑑」も、實際には『綱鑑』によると考えられる。『綱鑑』とは『資治通鑑』と『資治通鑑綱目』を合わせ、更に周威烈王以前と宋元以降の史書も合本して、様々な評語を加えた、科擧の受験參考書である。現在、余象斗の名前の記された『綱鑑』は、二種類確認されている。一つは萬曆二十八年（一六〇〇）に出版された『新刻九我李太史編纂古本歴史大方綱鑑』（李廷機の「刻歴史大方綱鑑序」に「萬曆庚子歲孟冬月」とある。庚子は萬曆二十八年。東京大學東洋文化研究所藏。以下『李氏綱鑑』と略稱）であり、もう一つは萬曆三十八年（一六一〇）に出版された『鼎鏗趙田了凡袁先生編纂古本

歴史大方綱鑑補」（韓敬の「敘袁先生綱鑑補」に「萬曆庚戌年仲夏月之吉」とある。庚戌は萬曆三十八年。東京大學總合圖書館藏。以下『袁氏綱鑑』と略稱）である。書名内の編纂者の名前、序、卷頭における署名、及び、後者が袁了凡の評を加えていること以外、兩者の内容はほぼ同一である。

それでは、『列國前編十二朝』の底本はどちらだったのだろうか。『袁氏綱鑑』に加えられた袁了凡の評から考察したい。注目すべきは帝乙に関する評語である。『袁氏綱鑑』には帝乙に関する評語が二つある。一つは胡五峰の評語、もう一つは袁了凡の評語で、帝乙に對する二人の評價は異なっていた。胡五峰は帝乙を「亦賢君也、泥於立嫡而不知紂之足以亡天下也、亦不知變之過矣。（帝乙も賢君であるが、嫡子を立てることに拘泥し、紂が天下を滅ぼすであろうことを知らなかった、まさに、變化を理解しなかった過ちだといえよう）」と評價した。つまり、帝乙が嫡子に拘泥し商朝の滅亡を招いたと判断したのである。一方、袁了凡は以下のような評語を書いている。

帝乙不可謂不知子也。卒奪於匹夫之咻、立惡而覆宗、辨言亂正、其太史之謂也。（帝乙が息子を理解していなかったとは言えないが、結局、匹夫のさかしらにより惡人を立てて商朝の滅亡を招いてしまった。詭辨を弄して正しきを亂すとは、太史のためにある言葉であろう）

袁了凡によれば、商朝の滅亡は帝乙でなく、太史が招いたものである。ここで、『列國前編十二朝』の「太丁命季歷伐燕京夷」則の「評斷」にある帝乙に関する評語を見てみよう。

仰止子曰……帝乙伊后不可謂不知子者、亦資君資后也。若太史不執愚見、任帝乙立微子故、則商國奚至於滅哉！商國之滅、罪不在

帝乙、受辛、罪在大史之咻咻不通也。今之朝臣不識大義、寧緘口勿言之可乎！(仰止子曰……帝乙と伊后が息子を理解していなかったとは言えない。すぐれた君后であろう。もし太史が愚かな考えに固執せず、帝乙の意のまま微子啓を立てていれば、商朝は滅亡しなかったろうに。商朝滅亡の責任は帝乙、受辛ではなく、太史のさかしらにある。今の朝臣が大義を知らないのであれば、むしろ口をつぐんで何も言わぬ方がよいのに)

この評斷の言葉遣いは袁了凡の評語に相似し、意見も袁了凡と同様に、商朝の滅亡は帝乙でなく、太史が招いたとしている。胡五峰の評語は萬曆二十八年の『李氏綱鑑』にも掲載されていたが、袁了凡の評語が加えられたのは萬曆三十八年の『袁氏綱鑑』においてであった。したがって、『列國前編十二朝』の底本は『袁氏綱鑑』であると見なしてよいだろう。

第二章 『列國前編十二朝』正文の構造

『列國前編十二朝』は四卷からなる分則本で、目録によると巻一に「西方佛定神開天關地」以下十六則、巻二に「黃帝軒轅滅蚩尤即位」以下十二則、巻三に「堯帝陶唐氏即天子位」以下十六則、巻四に「成湯聘伊尹放桀滅夏」以下十則、合計五十四則がある。巻一卷頭には、「三台山人 仰止 余象斗 編集」「閩雙峰堂 西一 三台館 梓行」と記され、續いて一字行頭を下げて「按鑑胡五峰曰……邵康節曰……仰止子曰……」とあり、その後第一則「西方佛定神開天關地」に入っている。前述の通り、『列國前編十二朝』は『綱鑑』に基づく小説であるが、『綱鑑』とは相違する点もある。相違点は五つある。第一則直前の「邵康節曰……仰止子曰……」、第一則の「西方佛定神開天關地」の部

分、戦争の描寫、神話及び傳説、そして仰止余先生詩の、五つである。「神話と傳説に關して、『列國前編十二朝』には、「女媧補天」、「精衛填海」、「后羿射日」等の神話及び傳説が加えられている。歴史史料の不足を神話と傳説によって補い、作品全體の分量を確保したのであろう。次に仰止余先生詩であるが、余象斗の出版した小説にはしばしば余象斗自作の詩が挿入されている。例えば、『水滸志傳評林』では文中にも評にも余象斗作の詩が見られる。これは、余象斗の出版したテキストの特徴とも言える。ここで特に注目したいのは、これら五つの相違点のうち、第一則の前にある「邵康節曰……仰止子曰……」、第一則の「西方佛定神開天關地」、及び戦争の描寫の三つについてである。以下、それぞれ検討を加えたい。

(一)「邵康節曰……仰止子曰……」 第一則の前に、胡五峰と邵康節の説がある。この胡五峰の説は『綱鑑』「盤古氏」の評語であり、周靜軒の説と胡五峰の説を合わせたものである。胡五峰の説に續いて邵康節の説がある。

邵康節曰：天始開於子，復卦也，子歷一萬八百年爲一會，丑歷一會，地始成，曰地關於丑，臨卦也。寅歷一會人始生，曰開物於寅，泰卦也。周十二宮，一十二萬九千六百年爲一元，終坤卦也，又是一箇大闢關，謂元始至終更以上亦復如是。(邵康節曰く、天が子から始まるのは、復卦である。子が一萬八百年を経ることを一會という。丑が一會を経て、地がはじめて形成された。曰く、地が丑に開けたことは臨卦である。寅が一會を経て人がはじめて生れた。曰く、物が寅から始まったことは泰卦である。十二宮を周って、十二萬九千六百年が一元であり、坤卦に終わる。これはもう一つの大きな開關である。元始から終わるまで、またこのように

繰り返すのである。)

これが本當に邵康節の言葉か否かは置くとして、問題は邵康節の説の位置にある。余象斗は、當時邵康節の説として廣く一般に認識されていた「天生於子、地生於丑、人生於寅」(天は子に生まれ、地は丑に生まれ、人は寅に生まれた)(例えば後述の『西遊記』第一回)と『列國前編十二朝』に見える「天地が生まれる前に盤古がいた」とする記述とは食い違うために、邵康節の説を引いた後に、「盤古は子と丑の間で、天は寅に生まれた」という「仰止子曰」のコメントを加え、この矛盾を解消した。この形式は後の則の最後にある「釋疑」によく用いられている。上記に鑑みれば、余象斗は、邵康節の説と「仰止子曰」のコメントを慣例通り第一則の最後に置かず、なぜ正文の前に置いたのかという疑問が生じる。邵康節の出番はここだけである。第一則最初の挿繪が「邵康節先生推演前定數」と題されていることも考え合わせれば、邵康節の説が、特に目立つように、第一則の前に置かれた事は明らかである。

さて、邵康節の言葉を冒頭で引用する明代の有名な小説は二つある。一つは『水滸傳』であり、もう一つは『西遊記』である。『水滸傳』は、文簡本も文繁本も、第一回の前に詞一首と邵康節の詩一首がある。詞はテキストによって異なるが、邵康節の詩はどのテキストでも同じである。『西遊記』の場合、邵康節の説は、第一回の前でなく第一回冒頭の詩に續いて現れる。内容は『列國前編十二朝』のそれに近く、「會元」に關する話である。

盖聞天地之數、有十二萬九千六百歲爲一元。將一元分爲十二會、乃子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥之十二支也。每會該一萬八百歲。……邵康節曰：冬至子之半、天心無改移、一

陽初動處、萬物未生時。……故曰：人生於寅……(天地の數は十二萬九千六百歲を一元とする。一元は十二會に分けられる。即ち、子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥の十二支である。一會は一萬八百歲である。……邵康節曰く、冬至は子の會の眞ん中で、天心は移らず變わらない。陽氣の初めて動くところ、萬物の未だ生れ出ない時なのだ。……故に曰く、人は寅に生まれ
た)

このように、『西遊記』第一回に「會元」に關する邵康節の説が見え、『水滸傳』第一回の前にも邵康節の説が引かれる。現存する資料から余象斗が『西遊記』を出版したかどうかは確定できないが、萬曆年間の『西遊記』のテキストの中に閩版があるという事實に鑑みれば、同時代福建地方における『西遊記』の流行が推測される。『水滸傳』については、余象斗自ら『水滸志傳評林』の出版を経験しており、邵康節の詩を第一回の前に置く事例を知っていたであろう。『列國前編十二朝』冒頭に邵康節の説が置かれたのは、『西遊記』、『水滸傳』から着想を得た可能性が高いのではなからうか。

(二) 第一則の「西方佛定神開天關地」 『綱鑑』の天地開闢は盤古に起源を置くが、『列國前編十二朝』では「西方佛定神開天關地」とされる。その部分の大意は以下の通りである。

西方世尊は萬國九州に同情し、毘多崩娑那に命令して天と地を分けさせた。毘多崩娑那は西方佛境を離れて大荒境に至り、盤古になった。開天關地をした後、世尊は續けて觀音大土をやって、甘露で盤古の體を洗い、盤古、即ち毘多崩娑那を西方佛境まで連れてきた。後、晝と夜が分かれていなかったために、毘多崩娑那は再び盤古になって、咸池へ行って日と月に天に昇ることを求めた。

盤古を佛とする傳説は史書には見られない。中國の歴史と佛教的世界觀を合わせて編まれた元・念常の『佛祖歷代通載』では、卷一は「七佛偈」で、卷二が盤古に始まる中國帝王の記載である。そこでの盤古は中國傳説中の盤古であり、佛ではない。しかし、「佛の同情で佛弟子が西方佛境を離れて人間の世界へ行く」という描寫は寶卷に見ることが出来る。例えば『古佛當來下生彌勒出西寶卷』（萬曆四十四年刊行）には次のようにいう。

靈山會上、觀音老母、文殊、普賢、阿難、迦葉、諸佛諸祖、頭陀長者、地藏菩薩、同進太皇宮中、奏請世尊、大赦慈悲、早出西林、救度眾生。（靈山の會において、觀音老母、文殊、普賢、阿難、迦葉、諸佛諸祖、頭陀長者、地藏菩薩らがともに太皇宮に入り、

世尊に、慈悲をもって早く西林を離れ衆生を救うよう請うた）
この中で、靈山という場所と主人公の世尊、及び觀音、阿難ら諸佛は、『列國前編十二朝』の冒頭にも見える。

卻說爾時西方世尊見萬國九州久閉不得升降、天愁地慘、鬼哭神嚎、猶人居水火之中、奔溺之狀、甚爲可憐。世尊即於靈山會上、從肉髻中、湧百寶光、光中湧出、千葉寶蓮、坐寶蓮中、放十道百寶光明、一一光明、皆遍示現、十恆河沙、擎山持杵、遍虛空界、大眾仰觀、畏愛兼抱、求佛開示、哀佑憐憫。……（さて、このとき西方の世尊は、萬國九州が長い閑閉じており昇降できず、天地は愁い悲しみ、鬼神も泣き叫び、まるで人間が火の中を逃げ回ったり水の中で溺れたりしているようであるのを見て、深い憐れみの情を起こした。そこで世尊は靈山の會において、肉髻から百寶の光を湧き出させた。光の中から千葉の寶蓮が現れ、世尊はその中

に座って、頭のてっぺんから十本の百寶の光を放った。光の一筋一筋にそれぞれ十の恆河沙が見える。金剛大山と金剛寶杵を持った神様が虚空に立っていて、大家は仰ぎ見て、畏敬して親しみ、佛の開示、同情と守護を求めた）

この後、阿難、觀音、毘多崩娑那が次々と登場する。兩者を比較すると、内容も形式も似通っていることが見て取れる。しかし、『列國前編十二朝』で最も重要な佛、即ち盤古になった毘多崩娑那は寶卷には見えず、他の佛典にも見られない。『列國前編十二朝』に現れる謎の佛は毘多崩娑那に止まらず、後に登場する「地皇」になった「地帝雜」佛も、出典が不明である。注目すべきは、毘多崩娑那と地帝雜という二佛が、『列國前編十二朝』で、中國の開闢傳説の人物と深い繋がりを持つとされることである。毘多崩娑那は盤古になり、地帝雜は地皇になった。言葉を変えらるならば、『列國前編十二朝』で開闢傳説に關わる人物の前世とされた佛が、佛典に見えないのである。しかし、「毘多崩娑那」と「地帝雜」という言葉自体は佛典に現れる。この二語は、ある佛典にしか見られない。それは『楞嚴經』である。『楞嚴經』の經咒の八十八番目と三百三番目に、それぞれ「毘多崩娑那羯唎」と「薩婆地帝雜槃泮」とある。『列國前編十二朝』に『楞嚴經』から引かれるのは、毘多崩娑那と地帝雜だけではない。先に引用した「從肉髻中、湧百寶光、光中湧出、千葉寶蓮、坐寶蓮中、放十道、百寶光明、一一光明、皆遍示現、十恆河沙、擎山持杵、遍虛空界、大眾仰觀、畏愛兼抱、求佛開示、哀佑憐憫」の描寫も『楞嚴經』に起源を持つ。この引用文と『楞嚴經』の原文はほぼ同一である。余象斗の『列國前編十二朝』編集時に『楞嚴經』が参照されたことはまちがいないと言っ

てよからう。「毘多崩娑那」も「地帝雜」も、『楞嚴經』の經咒の「毘

多崩娑那羯唎」と「薩婆地帝雞槃泮」から派生したものだといつてよからう。

經咒、即ち「眞言」は、『列國前編十二朝』正文にも見える。例えば第四則「地皇分晝夜日月星辰」で、世尊は「唵嚩哩哆叭囉囉」という七字の眞言を毘多崩娑那に教えるが、その眞言も『楞嚴經』に由来すると考えられる。『楞嚴經』の咒文は四百二十七句あるが、本當の咒文（正咒と言われる）は四百二十番目の「唵」から始まる三十四字である。その少し前に位置する、四百十一番目の咒文は「悉怛多般怛羅」である。『列國前編十二朝』の「唵哩哆叭囉囉」と『楞嚴經』の「悉怛多般怛羅」とは文字は異なるが、發音が非常に近い。『列國前編十二朝』の「唵哩哆叭囉囉」という七字の眞言は、正咒の最初の字である「唵」と四百十一番目の「悉怛多般怛羅」を合わせたものではないだろうか。

『楞嚴經』では咒文が人々によく知られていたがために小説に取り入れられたのだろうが、當時、咒文は不思議な力を持ち、唱えることで効力が生じると信じられていた。そのため、原文のまま引用することが憚られ、幾分かの調整を経て『列國前編十二朝』に取り入れられたのではなからうか。ここからも「毘多崩娑那」と「地帝雞」の形成過程が推測できる。『楞嚴經』の咒文には佛の名前が多く現れるが、『列國前編十二朝』に選ばれた「毘多崩娑那」と「地帝雞」はいずれも佛の名前ではない。盤古と地皇が元來佛であったという設定自体が佛教になかったため、既存の佛の名前は使えなかったのだと考えられる。「毘多崩娑那」には「破」（障害を突破する）の意味があり、盤古の開天闢地を象徴できる。「地帝雞」には「勇」の意味があるが、『列國前編十二朝』にある「世尊曰：地帝雞，汝爲地主……」という世尊

と地帝雞の話から見れば、「地帝雞」の「地帝」は「地皇」に近い意味を付會されていたと考えられる。「毘多崩娑那羯唎」と「薩婆地帝雞槃泮」の二句は、こうして盤古と地皇の前世の佛の名として選ばれたものと考えられる。ただ、余象斗が『楞嚴經』を参照したことはたしかであるが、『楞嚴經』の咒文は『朝暮課誦』などの大衆的な宗教書にも見えるので、余象斗がそれらを参照した可能性もある。

(三) 戦争の描寫 『綱鑑』に無く『列國前編十二朝』で加えられた内容は、大部分が戦争に關する描寫である。具體的には、「女媧氏が共工を討つ」、「黃帝が蚩尤を滅ぼす」、「九黎との戦い」、「禹が三苗を征伐する」、「啓が有扈侯を征伐する」、「少康が寒浞を滅ぼす」、「湯が桀を征伐する」、「仲丁が藍夷を征伐する」、「傳説が兵を指揮し、鬼方を征伐する」、「季歴が燕京之戎を征伐する」、「季歴が豳徒之戎を征伐する」の、合計十一回の戦争場面である。この中で、最も紙幅を費やしているのが、「九黎との戦い」である。余象斗の手になる詩は全編通して六百あるが、實にその三首が「九黎との戦い」のために書かれており、いかにこの戦争が重視されていたかが窺われる。まずこれを例にとつて、戦争描寫の手法について分析してみたい。

「九黎との戦い」は、目錄では「少昊金天氏即皇帝位」、「九諸侯領旨大戰九黎」、「勾龍用計攻城暗退兵」、「顓頊高陽氏即天子位」、「九天子點兵征伐九黎」、「勾龍用退圍記擒黎氏」の六則を占める。あらずじは、少昊は即位後、九黎謀反征伐のため、勾龍に九諸侯を率いさせたが決着が付かなかった。少昊の死後即位した顓頊が再び勾龍に九天子を率いて九黎を征伐させ、終に勝利を収めるというものである。最初の戦争は、九黎兄弟の外見の描寫に始まり、九諸侯の軍備を紹介する。兩軍對峙に際しては、必ず「對陣打話（陣頭の呼びかけ）」をしてか

ら開戦する。二戦目も一戦目に同じく、まず九太子の外見と軍備を紹介し、やはり「陣前打話」を経て戦い始める。最後は九黎が殺されて、「正是鞭敲金鐙響、齊唱凱歌回（まさに、鞭で鐙を打ち鳴らし、聲をそろえて凱歌を歌い歸還したのであった）」という二句で終わる。

この戦争に限らず、他の戦争も右に類似した展開で描かれる。以下に戦争の描寫手法をいくつか挙げよう。

(1) 人物の描寫

『列國前編十二朝』では、「九太子點兵征伐九黎」という則の冒頭で、「且看九太子怎生打扮出兵、且說（九太子の出兵のいでたちいかに見れば）」と句があり、その後で、九太子を紹介する。例えば、長太子の場合、次のようにいう。

長太子名駱明、年二十三歲、生得白臉烏鬚、身長一丈三尺、頭戴紫金盔、身穿百花錦戰袍、坐下一疋白龍馬、手持丈八鎗、直奔教場而來。（長太子の名は駱明、年は二十三歲、白い顔に黒い鬚、身の丈は一丈三尺。頭に紫金盔を戴き、身に百花の錦戰袍をまとい、一匹の白龍馬に乗って、手には丈八の鎗を携え、教場にむけて一目散に驅けて来る。）

他の八太子も同様の描寫方法によって描かれる。「年齢、生得……身長……頭戴……身穿……坐下……手持……」のように登場人物の外見を描寫する形式は、『三國志演義』、『水滸傳』に數多く見られる。余象斗は自ら『三國志演義』、『水滸傳』を出版したことがあり、余象斗筆の評語まで加えているほどであるから、このような描寫法は、『三國志演義』、『水滸傳』から着想を得た可能性が高いと考えられる。

(2) 「陣前打話（陣頭の呼びかけ）」

開戦前に、雙方の大將が互いを罵り合う例は『三國志演義』、『水滸

傳』にも見える。例えば、『水滸傳』の第六十七回「宋江賞馬歩三軍關勝降水火二將」には、

單廷珪、魏定國大笑、指著關勝罵道：「無才小輩、背反狂夫！上負朝廷之恩、下辱祖宗名目、不知死活！引軍到來、有何禮說！」

（單廷珪と魏定國は大いに笑い、關勝を指さして罵った。「無能な小童が！謀叛者の狂人めが！上は朝廷のご恩情に背き、下は先祖の名を辱め、身のほど知らずにも軍隊をひきつれてきおって、なにが挨拶だ！」）

とある。同様の對話は『列國前編十二朝』にも見られる。例えば「女媧氏が共工を討つ」には、

柏皇央皇二人大罵康回曰：「無端匹夫、不思先君之德、肉尚未冷、即行不義、害亂生靈、是何道理！」（柏皇と央皇二人は康回を大いに罵った。「不品行極まる匹夫め、先君の徳を思わず、先君の體も冷えぬうちに、不義を働き生靈を殺したのだ。これは何の道理ぞ。」）

とある。『列國前編十二朝』の十一回の戦争のうち、最後の二回の戦争には「陣前打話」がないが、末尾二回の戦争は、前の九回と比べると分量も少なく、對話も少なく、描寫もぞんざいである。刊行を急ぐあまり、本筋にさほど関係のない「陣前打話」は省略されてしまったのだろうか。或いは、枚数を削減してコストダウンを圖るために省略された可能性もあるだろう。しかし、「陣前打話」のある九回の戦いのうち、六回において「陣前打話」の挿繪があることを考えると、「陣前打話」は、作者にとってそれなりに重要な意味があったと考えよう。

(3) 「秋毫無犯（民をいささかも苦しめない）」

「禹が三苗を征伐する」と「少康が寒泥を滅ぼす」に、それぞれ「一路秋毫無犯、不許鳴金擊鼓（道中民をいささかも苦しめず、どら鳴らすことと鼓を打つことを禁じた）」と「一路無阻、秋毫無犯（道中阻むものがなく、民をいささかも苦しめなかった）」という描寫がある。「秋毫無犯」という四字も『三國志演義』、『水滸傳』によく見られる。因みに、「所過州縣、秋毫無犯」という八字が特に注目され評が付されたのは、現存するテキストに見る限り、萬曆四十二年出版の袁無涯本『水滸傳』からである。袁無涯本の第五十八回の「於路無事、所過州縣、秋毫無犯」に「春秋書法」という旁批がある。また、第五十九回の「所過州縣、秋毫無犯」にも「此兩句的精神主意屢屢提出、與招安語相映、此是一傳根本（この二句の主旨は度々提出されるが、招安という言葉と呼應する。これは『水滸傳』の根幹をなす）」という眉批がある。袁無涯本では「所過州縣、秋毫無犯」という言葉に必ず評語或いは圈點が付されている。こうしたことから、袁無涯本評者が、この言葉を重視していたことがわかる。

(4) 「鞭敲金鑼響、齊唱凱歌回（鞭で鑼を打ち鳴らし、聲をそろえて凱歌を歌い歸還した）」

「女媧氏が共工を討つ」で、戦争は、「正是鞭敲金鑼（鑼）響、齊唱凱歌回」の二句で終わる。また、前述の通り「九黎との戦い」もこの二句で終わるが、同句は『三國志演義』、『水滸傳』に見える。例えば、『水滸傳』第五十回「吳學究雙掌連環計 宋公明三打祝家莊」に、祝家莊を打ち破った後、「宋江等眾將一齊上馬、將軍兵分作三隊擺開、前隊鞭敲金鑼、後軍齊唱凱歌。（宋江等の諸將は一齊に馬に乗り、軍隊を三つにわけ、前の部隊は鞭で鑼を打ち鳴らし、後の部隊は聲をそろえて凱歌をうたった）」とある。『三國志演義』第九十一回「祭瀘水漢

相班師 伐中原武侯上表」にも、「果然鞭敲金鑼響、人唱凱歌還」とある。「鞭敲金鑼」は『三國志演義』、『水滸傳』だけではなく、「全相平話」にも見える。「全相平話」が建安で刊行されたことを考えると、建陽地區で小説を作る際に、この種の定型句がよく使われていたようである。

『列國前編十二朝』には、上述の(1)〜(4)の他にも『三國志演義』、『水滸傳』に由来する描寫や場面が多い。例えば「滾鞍下馬」や「拜伏」といった尊敬の念を伝えるための儀禮的動作、殺人情況の描寫、城を打ち破った際に倉庫の寶物を人民に贈ること、そして、九黎の最期に關わる描寫である。「九黎との戦い」の最後で、黎弼が亂れ矢で殺されたこと、黎貪と黎巨が城の上で黎祿の首級を見たことは、『水滸傳』における張順の死の場面に似ている。『水滸傳』第一百十四回「寧海軍宋江吊孝 湧金門張順歸神」には、

張順從半城上跳下水池裡去、待要趁水沒時、城上踏弩、硬弓、苦竹箭、鵝卵石、一齊都射打下來。可憐張順英雄、就湧金門外水池中身死。……只見李俊使人飛報將來說：「張順去湧金門越城、被箭射死於水中、現今西湖城上把竹竿挑起頭來、掛著號令。」宋江見報、又哭得昏倒。（張順は城壁の半分程の所から池に飛び込んだが、水の中に潜ろうとするとところへ、城の上から踏弩、硬弓、苦竹箭、鵝卵石を一齊に射かけられた。あわれむべし、英雄張順はかくして湧金門外の池で殺されたのである。……と、李俊が人をやって急報してきた。「張順は湧金門の城壁を越える時に、矢に撃たれて水中で死にました。今西湖の城の上で、竹竿に首をぶらさげられ、さらし首にされています。」宋江はその知らせを聞

くやいなや、再び泣き出して氣を失った)

とある。『列國前編十二朝』では、黎弼は一人敵軍に入って、「強弓硬弩四面射進(強弓や硬弩を四方から射かけた)」という形で死んだ。黎祿は兄弟の仇を討つために、矢石で攻撃され、逃げ切れずに自刎した。その後、首を切られて城の上に懸けられた。そして、『水滸傳』に「宋江見報、又哭得昏倒」とあるのと同様に『列國前編十二朝』でも「三黎聞報、放聲大哭(三黎は報せを聞いて大聲で泣き出した)」とある。九黎は朝廷の叛徒であった。しかし、黎祿の自刎と黎弼の「至死而身不倒手不放鎗、其馬被弼兩脚挾住不能走脫、亦被射死(黎弼は死ぬまで倒れず、鎗を手放さなかった。馬も黎弼の兩足に挟まれて逃げられないので、射られて死んだ)」という描寫を見ると、余象斗はこの二人を、他の叛徒に比べて、異常に壯烈なものとして描いていることがわかる。そしてさらには彼らの勇敢さを讚嘆するために自ら詩を書き「英魂」をたたえてもいる。余象斗は『水滸志傳評林』の張順の死の所にも自ら詩と評を書いていることから、張順の死は余象斗に深い印象を残したであろうことがうかがえる。余象斗がこの部分を書いた時、張順から影響を受けていたと考えられる。

以上の諸點によって、余象斗が戦争の場面を描いた際、『三國志演義』、『水滸傳』を参照したと考えてよからう。戦争の場面以外に、『列國前編十二朝』における仲康の死の描寫についても検討したい。仲康の死については、『綱鑑』には「在位十三歲崩」とあるだけだが、『列國前編十二朝』では「卻説、帝因飲魚湯腹痛、疝病十餘日、自知不起、召群臣於臥榻……言罷而崩(さて、帝は魚のスープを召し上げられたために、お腹を壊された。十日餘り病臥され、好轉し得ないのをご存知になり、群臣を寢臺のそばに呼ばれ……仰せ終わると崩御さ

れた)」としている。仲康の死因に関する記載は他の史書にもない。しかし、『水滸傳』の宋江が、まさに、魚でお腹を壊しているのである。『水滸傳』第三十九回「潯陽樓宋江吟反詩梁山泊戴宗傳假信」に宋江因見魚鮮、貪愛爽口、多吃了些、至夜四更、肚裡絞腸刮肚價疼。天明時、一連瀉了二十來遭、昏暈倒了、睡在房中。(宋江は魚のいきがよくて味がよかったので、食べすぎてしまった。夜の四更になると、腸がねじられ腹がえぐられるような激しい腹痛に襲われた。夜明けまで二十回程下痢を繰り返し、目がくらんで部屋に寝込んでいた)

とある。兩者を並べると内容の類似に眼を引かれる。仲康の死の筋は、宋江の腹痛から着想を得た可能性が高いのではないか。ただ、この宋江腹痛の内容は、余象斗の『水滸志傳評林』になく、繁本系統『水滸傳』のみに見られるのである。

余象斗は萬曆二十二年(一五九四)に『京本增補校正全像忠義水滸志傳評林』(『水滸志傳評林』と略稱)を出版しているが、興味深いことに、『列國前編十二朝』で余象斗が據っているテキストは、どうやら、自ら出版した簡本系統の『水滸志傳評林』ではなく、繁本系統の『水滸傳』だと考えられるのだ。前述した「鞭敲金鑼響、齊唱凱歌回」という二句も繁本系統『水滸傳』にはあるが、余象斗の『水滸志傳評林』には見えない。余象斗が自ら出版した『水滸志傳評林』を参照せずに繁本系統『水滸傳』を利用した理由は、戦争描寫が簡本より生き生きしていること以外に、『列國前編十二朝』編集の時期がまさに繁本系統『水滸傳』の流行期に重なったためだとも考えられる。『列國前編十二朝』の競争力を高めるために、當時最も人氣のある小説テキストを参照することはごく自然なことであらう。周亮工『書影』

の序によると、萬曆三十五年以前には繁本系統『水滸傳』は流行していなかったようである。萬曆三十八年に虎林(杭州)の容與堂が『水滸傳』百回本評本(容與堂本)を出版し、その後、萬曆四十二年に吳門(蘇州)の袁無涯が『水滸傳』百二十回本評本(袁無涯本)を出版した。袁無涯本は正文、詩詞韻文を問わず容與堂本より平俗なテキストであった。また、出版地から見れば、袁無涯本は『列國傳』をめぐる競争激烈なる蘇州である。更に、第一章で言及した競争相手である朱草本も蘇州で刊行されていた。おそらく余象斗が『列國前編十二朝』を編む際に、萬曆三十八年の『袁氏綱鑑』に基づいて、『三國志演義』と蘇州のテキストである袁無涯本『水滸傳』を参照し、自らの『列國志傳評林』と一組にし、蘇州での販賣を意圖したのでらう。

第三章 『列國前編十二朝』の評と注

『列國前編十二朝』の評注の形式には二種類ある。一つは正文中に挿入した雙行小字注、もう一つは各則の正文の後に付された表題のある評語である。

雙行小字注はほとんどが『綱鑑』からの引用と言え、新しい内容はごく一部だけである。それら『綱鑑』からの注の引用は『綱鑑』の内容を『列國前編十二朝』の正文にした際に一緒に引き寫したものである。つまり、それら注がつけられている部分の正文も『綱鑑』からの引き寫しである。『列國前編十二朝』の戦争描寫の部分につけられている注は他の部分の注の分量より少なく、また、『綱鑑』からの引用でもない。このことから、余象斗が『綱鑑』から引用する場合、正文と注をまとめて行う方針であったことがうかがえる。新しい注は、いずれも『綱鑑』の形式にならっており、讀者の立場に身を置いて考え、

比較的難しい箇所に、注音釋義、地名人名の解釋、出典及び簡單な人物の外見描寫を加え、讀者の疑問がすぐに解決できるようにしてある。則後の評語は、雙行小字注とは異なり、約半分が独自の新しい内容である。表題から見ると、釋疑、地考、總釋、評斷(鑑斷、斷論、鑑論、論斷)、附紀、補遺、荅辨の七種がある。内容から考えるならば、三種類に分類できる。一つは『綱鑑』に據るもの、また一つはその則の内容に對する「釋疑」、「地考」と「補遺」、最後は余象斗自身の評語である。『綱鑑』に據ったものは雙行小字注の場合と同じく『綱鑑』の内容を『列國前編十二朝』の正文にした時に、一緒に引き寫したものであるから、それら評語の、直前の正文と次の則の冒頭の正文も『綱鑑』に據るものであり、順序も『綱鑑』の順序と同じである。だが、「釋疑」、「地考」と「補遺」などの新しい内容については、明らかに直前の正文が『綱鑑』からの引用ではない。寫す対象がないから、正文に對して、新たにしかるべき評が書かれたのである。ここで一例として「西方佛定神關天關地」則の「釋疑」を見てみよう。この部分は大きく二つに分けられる。前半では『廣雅』を引いて天地等の距離を説明し、それに續く後半部が、觀音に關する以下の内容である。

問曰：「觀音乃妙莊王三公主修成，彼時那有觀音大士？」答曰：「非也。言觀音者，觀世上之音，非妙莊王時觀音也。譬言世尊，亦稱佛乃世上之至尊，焉有差謬。」(たずねて言った。「觀音は妙莊王の三公主が修行を積んで變化されたのである。その時、觀音大士は居られぬはずであろう。」答えて曰く、「そうではない。觀音とは、世上の音を聞くことであり、妙莊王の時の觀音ではない。例えば、世尊とは、佛が世上の至尊であることを言うのである。従って、間違ではない」)

觀音に關して疑問が呈せられたのは、當時觀音を妙莊王の三公主とする物語が流行していたためである。明以前の佛典では、觀音は菩薩であつて、人間ではなかつた。余象斗の「觀世上之音」という解釋は觀音の元々の意味をいう。ここに「妙善成道（妙善が觀音になつた）」という言い方は、明朝前期の『觀世音菩薩行經簡集』（『香山寶卷』）にはじまる。萬曆期には『觀世音菩薩行經簡集』に基づいて、福建煥文堂から『新鐫全相南海觀世音菩薩出身修行傳』（『南海觀音全傳』と略稱）なる小説が出版された。また、萬曆二十六年には、南京富春堂から『觀世音修行香山記』（『香山記』と略稱）と題する傳奇も刊行された。こうして、「妙善成道」は民間に廣く流通して行つた。余象斗は、「妙善成道」傳説の流行する環境下で『列國前編十二朝』を編集した。しかし、『列國前編十二朝』の觀音は人類誕生以前から存在する佛であり、妙善公主ではない。このため余象斗は、天地開闢以前の觀音と妙善公主の變化した觀音との間に生じる矛盾を解釋する必要に迫られる。かくして、この「釋疑」が書かれたのであろう。

最後に、余象斗の手になる評語を見てみよう。『列國前編十二朝』には余象斗作の詩以外に余象斗筆の評論も見られる。その詩の前に「仰止余先生觀到此、有詩爲證」と付されているのと同様に、その評論の前には「仰止子曰」「余仰止」と書かれている。評論は五箇所あり、前述した「邵康節曰」後の「仰止子曰」以外の四つは節後の評語に置かれている。以下に「盤庚復興作書湯王政」則の「鑑斷」にある「仰止子曰」を例として挙げよう。雷に關する解釋である。

仰止子曰：雷乃有形之物，乃胎生有種類，藏于深山之中生育，有兩脚、嘴尖、身有毛、有兩翅、手若雞形。……（仰止子曰く、雷は形ある物である。胎生で種類がある。深山に隠れて成長する。

余象斗の『列國前編十二朝』について

二本足で、とがった口、身には毛がある。二枚の翼を持ち、手は鶏の爪のようである）

余象斗の評は荒唐無稽のように見えるが、實は彼自身が創造した解釋ではなかつた。謝肇淪の『五雜俎』（卷一）に、

今嶺南有物，雞形肉翅，秋冬藏山土中，掘者遇之，轟然一聲而走，土人逐得殺而食之，謂之雷公。（現在嶺南には怪物がいる。鶏の形をしており肉翼を持つ。秋と冬には山の土に隠れている。掘り當てると、どかんと音がして逃げる。土地の者は追いかけて殺してこれを食する。雷公と謂う）

とあり、『五雜俎』の描寫と余象斗の説明がよく似ている。謝肇淪は余象斗と同じく福建の出身であり、雷を鶏のようなものとする話は、當時少なくとも福建ではよく知られていたようである。それゆえ謝肇淪は記録を残し、余象斗は評を記したのであろう。

以上見てきたように、『列國前編十二朝』の評注において、『綱鑑』から引用された評と注は、前後の内容が『列國前編十二朝』の正文になる時に、一緒に寫されたのである。そして、『綱鑑』に由来しない小説の正文に適當な注、評をつけ、疑問があがる所に「釋疑」を書き、余象斗筆の評論を入れ、小説全篇のバランスを取ろうとしたのである。

おわりに

『列國前編十二朝』の出版後、商朝以前の歴史を題材にする小説が次々に現れ、以下の四作品が現存している。

- 一、『按鑑演義帝王御世盤古至唐虞傳』（『盤古誌傳』と略稱）
- 二、『按鑑演義帝王御世有夏誌傳』（『有夏誌傳』と略稱）
- 三、『按鑑演義帝王御世有夏誌傳』（『有夏誌傳』と略稱）
- 四、『按鑑演義帝王御世有夏誌傳』（『有夏誌傳』と略稱）

がある。正文の最後に「不知後事如何、看下商傳再說」とあることからみれば、『有夏誌傳』は次の『有商誌傳』と一組にして販賣されたのであろう。

三、『按鑑演義帝王御世有商誌傳』四卷（『有商誌傳』と略稱）
四、『新刻按鑑編纂開闢衍繹通俗志傳』（『開闢衍繹通俗志傳』と略稱）六卷八十回、崇禎八年（一六三五）麟瑞堂の刊本、「五嶽山人周游仰止集」、「靖竹居士王鬻子承釋」と題する。「開闢衍繹敘」、「附錄乩仙天地判說」がある。

これら四つの小説のうち、『盤古誌傳』、『有夏誌傳』、『有商誌傳』の三作品は神仙や妖怪の物語が多く、歴史から逸脱した感がある。戦争の描寫に關して、『盤古誌傳』には、前述の『列國前編十二朝』に特徴的な『三國志演義』、『水滸傳』を模倣したような描寫が全く見られない。『列國前編十二朝』で最も紙幅を割いている「九黎との戦い」の描寫も、「後少昊氏衰、黎氏九人爲諸侯而作亂、當時民間多有怪異（後、少昊氏は衰え、諸侯である黎氏の九人が叛亂した。この時、民間には怪異な事件が數多く起こった）」という記述に止まり、「白骨小兒叉手跳走」などの恐ろしげな妖怪の物語に繋がってゆく。『盤古誌傳』だけではなく、『有夏誌傳』と『有商誌傳』の描寫方法も『列國前編十二朝』とは異なっている。同じ時代を對象とし、『有夏誌傳』の「不知後事如何、看下商傳再說」という販賣手段が『列國前編十二朝』の「至武王伐紂而有天下、『列國傳』上載得明白可觀、四方君子賈『列國』一覽盡識」に通じているところから考えるならば、三者は『列國前編十二朝』の影響を受けてはいるものの、直接『列國前編十二朝』に基づいて創作された作品ではないように見受けられる。残る『開闢衍繹通俗志傳』だけは、巻頭の「五嶽山人周游仰止集」という

署名と、評語の「余仰止曰」から、『列國前編十二朝』の剽竊であることが明らかである。なお、利用された『列國前編十二朝』のテキストは、天理圖書館本だと考えられる。

湖北西南の神農架には、「黑暗傳」という歌謠が伝えられている。「黑暗傳」は、盤古の天地開闢により黒い混沌時代が幕を閉じた神話を主題としており、葬儀に際して歌われた。張忠臣抄本によると、この歌の最初には「混沌初開出盤古、身長一十二丈五、手執開天闢地斧、佛祖差他下山來、來到大荒山前存（天地が初めて開けて盤古が現れた。身長は十二丈五尺。手に開天闢地斧を持ち、佛祖の命令に従って山を離れ、大荒山に至った）」とある。そして、晝夜不分のために、佛祖が再び盤古に命じて咸池へ差し向け、日と月に天に昇ることを求めた話が續く。「黑暗傳」の内容は『列國前編十二朝』によく似ている。本稿は『列國前編十二朝』について考察したが、本書に限らず、余象斗他の出版物も、同様に深く地域社會に根ざし、民衆の生活に強く結びついていたものと、筆者は考えている。余象斗の出版物に對しては、今後さらに研究を深めていきたいと考えている。

注

- (1) その刊行の意圖については、丸山浩明氏によると、余象斗は各朝代の通俗演義史を編集しようという意圖があり、『列國前編十二朝』は余象斗が企畫した通俗演義史の構想の一つであるという。詳細は丸山浩明「余象斗本考略」（『明清章回小説研究』所收、汲古書院刊）を参照。
- (2) 大塚秀高「講史章回小説の出版と改變——『列國志』をめぐる——」（『中國古典小説研究動態』第3號、一九八九）八〇頁を参照。

- (3) 神宮文庫本は各巻にそれぞれ九、十、七、五葉の計三十一葉があるが、天理圖書館本は巻四の挿繪が神宮文庫本より二枚多く、計三十三葉がある。
- (4) 前掲大塚論文八一頁を参照。
- (5) 前掲大塚論文八五頁を参照。
- (6) 原文は「Although Jianyang was a major publishing center in its own right, it may also have produced blocks and printed sheets and/or the finished bound imprints for publishers elsewhere. After all, the various steps in printing and publishing a book did not have to be done in a single place, and printed sheets or even the blocks themselves might have been moved to the place of publication after they were produced. …possibly the cheaper production costs in Jianyang or simply the need for more printing blocks than local blockcarvers could supply, may mean that some books "published" in Fuzhou were physically produced in Jianyang.」
- (7) 明末の書物の出版地についての詳細は大木康『明末江南の出版文化』(研文出版、二〇〇四)を参照。
- (8) 『綱鑑』についての詳細は前掲高津論文及び上田論文を参照。
- (9) ともに周威烈王以前の史書は劉恕の『資治通鑑外紀』と金履祥の『通鑑前編』、宋元以降は陳桎の『通鑑續編』と商略の『續綱目』を用いたもの。
- (10) 『列國前編十二朝』が参考にした『綱鑑』については、上田望「講史小説と歴史書」(4)「英雄物語から歴史演義へ」の第7章第2節「列國前編十二朝」と余象斗(金澤大學中國語學中國文學教室紀要4號、二〇〇〇)六十一―六七頁を参照。
- (11) 『李氏綱鑑』と『袁氏綱鑑』以外に、福建余氏から出版した『綱鑑』
- はもう一つある。『湯睡菴先生歷朝綱鑑全史』である。同書は、『袁氏綱鑑』を藍本とし、萬曆三十八年以後のものだと考えられる。(井上進「舊書筆記」(二)『颯風』二七、一九九二)参照)同書には余象斗の名が見つからず、余象斗の出版かどうかは確定できない。
- (12) 目録と正文の題目は一致しない。例えば、目録の卷一にある「盤古開天地混沌之法」という題目は正文にはないし、正文の卷二にある「顯頂滅黎降伏四夷地」という題目は目録にはない。或いは題目が目録と正文で少し異なることもある。例えば、目録の卷一にある「炎帝嘗藥性以療民疾」は正文卷一には「神農嘗百草療民病疾」とある。
- (13) 『列國前編十二朝』に、「胡五峰曰：渾沌之世、天地始分、有盤古者、生於太荒、莫知其始、明天地之道、達陰陽之變、爲三才首君、於是混沌開矣。(胡五峰曰く、混沌の世に、天と地が分かれ始めた。盤古は太荒に生まれ、彼の身の上はわからない。彼は天地の道を知り、陰陽の變化に通じており、三才の頭となって、混沌が開けた)とあり、『綱鑑』には「周靜軒曰……渾沌之世、天地始分、有盤古氏出、所以繼天出治也。(周靜軒曰く……混沌の世に、天と地が分かれ始めた。盤古氏が現れ、天を繼承して管理した)と「胡五峰曰：盤古生於太荒、莫知其始、明天地之道、達陰陽之變、爲三才首君、於是混沌開矣。(胡五峰曰く、盤古という者は太荒に生まれ、その先祖はわからない。彼は天地の道を知り、陰陽の變化に通じており、三才の頭となって、混沌が開けた)とある。
- (14) 『西遊記』の閩版について、『新鐫全像西遊記傳』(萬曆三十一年の序がある)は「閩書林楊閩齋」から出版されたものである。
- (15) 『楞嚴經』卷七に、「從肉髻中、湧百寶光、光中湧出、千葉寶蓮、有化如來、坐寶華中、頂放十道、百寶光明、一一光明、皆遍示現、十恆河沙、金剛密跡、擎山持杵、遍虛空界、大眾仰觀、畏愛兼抱、求佛哀佑。」とある。

(16) 『楞嚴經略疏』に、「此咒凡四百二十七句、前四百十八句皆是皈敬諸佛菩薩聖賢等、及敘咒願加被離諸惡鬼病等。至四百十九句云哆侄他、此云即說咒曰從唵字去方是正咒、其大意即祕密首楞嚴也。」とある。『楞嚴經略疏』の著者は元賢。福建建陽の人で、萬曆六年（一五七八）に生まれ、清の順治十四年（一六五七）に没した。

(17) この七字の眞言については、『列國前編十二朝』をそのまま寫したものと考えられる『新刻按鑑編纂開關衍釋通俗志傳』では、『列國前編十二朝』の「唵唵咄咄叭囉囉」を「唵唵咄咄囉囉叭囉叭」に變えている。『新刻按鑑編纂開關衍釋通俗志傳』の「唵唵咄咄囉囉叭囉叭」は『列國前編十二朝』の「唵唵咄咄叭囉囉」よりも更に『楞嚴經』の「悉怛多般怛囉」に似通っていると云えるだろう。

(18) 袁了凡『了凡四訓』に、袁了凡が經咒を唱えて願いがかなったことが記されている。袁了凡が南京付近のある寺に滞在した際に出會った雲谷という禪師から教わった「準提咒」を唱えて善行を積むことよって運命を覆し、子供を得て進士に及第し、壽命をも延ばしたという内容である。

(19) このような例は『三國志演義』、『水滸傳』だけではなく、當時流行していた他の小説、例えば『封神演義』にもある。しかし、余象斗自身『三國志演義』、『水滸傳』出版の経験があることと、後述の例を併せて考えれば、この描寫法は『三國志演義』、『水滸傳』の影響を受けていると考えてよからう。

(20) 「横戈立馬殿狼奔、蝟矢還能顧笑翻；明月似憐堆恨處、宵風纏草隱英魂。」詩の二句目は意味不明で、『開關衍釋通俗志傳』は「蝟矢孤身野戰昏」としている。（戈を持って馬に乗り敵陣を陥れ、體に矢が刺さっても一人で日が暮れるまで戦った。明月は黎瓘の死を哀れむかのようで、草が夜風に吹かれてその英魂を覆った。）

(21) 『書影』卷一の『水滸傳』一百回を論じる所に、「予見建陽書坊中所刻

諸書、節縮紙板、求其易售、諸書多被刊落。此書亦建陽書坊翻刻時刊落者。六十年前、白下、吳門、虎林三地書未盛行、世所傳者、獨建陽本耳。（建陽書坊から刻された諸書を見ると、紙板を節約し、賣りやすさを求めるために、諸書は多く節略されている。この書も建陽書坊の翻刻した時に節略された。六十年前には白下、吳門、虎林という三地の出版物が未だ盛んでなく、世に傳わるのは建陽本のみだ）という話がある。周亮工の息子の序に「丁未之冬、刻是書於金陵」とある。丁未は康熙六年（一六六七）であり、この書は康熙六年に刊行されたことがわかる。従って、「六十年前」は萬曆三十五年頃のことを指すのであろう。當時、南京蘇杭さえも、建陽本『水滸傳』が最も流行していたことがわかる。

(22) 『列國前編十二朝』の各評注が『綱鑑』のどの部分の引用なのかについては、前掲上田論文「講史小説と歴史書（4）」英雄物語から歴史演義へ」にある一覽表を参照。

(23) 『綱鑑』の注に對する修正もある。例えば、『列國前編十二朝』「伏羲畫八卦定天」の華胥の所についている「華胥、地名。今陝西藍田縣。史記誤作羲母名華胥、非」という注は、『綱鑑』の注である「華胥、地名、在陝西藍田縣。小洲曰渚。史記：母曰華胥」を寫した時に修正されたのであろう。

(24) 『法華經』に「菩薩即時觀其音聲、皆得解脫、以是名觀世音。（菩薩が苦難にあえぐ人々の聲を聞くと、皆解脫できる。そのため觀世音と名づけられた）」とある。

(25) 天理圖書館本には、神宮文庫本にない「敘歷傳始末」と「求乩仙降書者附錄」が冠されている。『開關衍釋通俗志傳』の「開關衍釋敘」は、天理圖書館本の「敘歷傳始末」を手本として完成されたものだと考えられる。『開關衍釋通俗志傳』の「附錄乩仙天地判說」は、天理圖書館本にある「求乩仙降書者附錄」の冒頭に、「昔有一士子求問乩仙天地如何開關乩仙降筆云」という二十字が加えられたものである。したがって、

『開關衍繹通俗志傳』の依據したテキストは天理圖書館本だと考えられる。

(26) 劉守華『黑暗傳』追蹤」〔漢學研究〕十九卷第一期)を参照。